

専攻科（保育専攻）における「修了研究及び論文」の実践報告[†]

小林伸雄

KOBAYASHI Nobuo

夙川学院短期大学に専攻科（保育専攻）が設置され、3年制の保育士養成課程として認可を受けてから8年が経過し、これまで5期にわたる修了生を輩出してきた。その間幾度かのカリキュラムの変更がなされたが、「修了研究及び論文」（以下「修了ゼミ」とする）は3単位の修了必修科目として、変わることなく専攻科（保育専攻）におけるカリキュラムの中心に位置づけられてきた。

戸惑いながら始めた「修了ゼミ」も5年目ともなると過去の学生の研究成果や指導者側のノウハウも蓄積され、研究内容の質的な高まりが見られるようになってきた。

そこで小論では2008年度の「修了ゼミ」の中から一事例を取り上げ、テーマ設定から研究発表およびその成果までを詳述することによって、実践報告とする。

キーワード：保育者養成、ゼミ、卒論、学生の社会参加意識、自己肯定感

1. はじめに

「修了ゼミ」は専攻科（保育専攻）における修了必修科目として発足当初より3単位という少なくともは単位数を設定し、学生に専攻科生としての自覚と学習意欲の向上を促すカリキュラムの中心的存在として位置づけられてきた。

「修了ゼミ」が四年制大学における卒業論文に相当するものであるとの考え方は教員・学生共に多少の温度差があるとは言え、ほぼ共通の認識を得ているものと言ってよい。

当初「修了ゼミ」は時間割の中には組み込まず、教員の空き時間と学生の空き時間を照らし合わせながら任意に時間を設定するという自由度の高さもこの科目の特殊性を表わしている。学生や教員の中には戸惑いを覚えるものもいたが、自分なりのペースで研究活動が行えることから概ね学生や教員の受け取り方も良好であった。

学生は論文の場合400字詰め原稿用紙に換算して30

枚程度を基準として提出することになっている。また、作品や演奏といった形式をとる場合にも同じく10枚程度の副論文の提出を義務づけている。学生にとっては他の授業や実習の合間を縫っての研究活動であり論文執筆であるため、かなりの苦勞を強いられる訳であるが、この「修了ゼミ」によって専攻科（保育専攻）生としての自覚や帰属意識を持つようになる学生も少なくない。

このような「修了ゼミ」も5年目を終え、手探りで始めた学生への指導もようやく形ができてきて、一定の成果を上げることが可能になってきたと言える。

最新の2008年度の「修了ゼミ」（小林ゼミ）受講生の中から特定の一名を選び、テーマ設定など研究活動の最初から研究発表およびその成果までを詳述することによって、「修了ゼミ」を5年間指導してきた結果到達した現時点での自分なりのまとめとしたい。

2. 方法

調査期間：2008年4月14日～2009年2月28日

調査対象：夙川学院短期大学児童教育学科・専攻科
(保育専攻) 「修了ゼミ」(小林ゼミ) 受講生 前川
あゆみ

手続き：「修了ゼミ」(小林ゼミ)の開始から終了までの経過をたどり、その時々における前川の考察や課題設定、指導内容と課題達成に到る経緯などを報告することによって「修了ゼミ」の自分なりの方法論を浮かび上がらせる。

3. 授業の展開と考察

<「修了ゼミ」の受講登録>

「修了ゼミ」は4月のオリエンテーション時の教員によるゼミ内容の口頭説明から実質的にスタートする。

口頭説明の時に配布される前年度の『「修了研究および論文」研究録』とそれぞれの教員が研究分野を簡単に紹介したプリントでもおおよその研究内容を想定することはできるが、学生がより深くそれぞれの教員の専門分野と研究内容を理解するのは、その後に行われる教員との直接面談によってである。

学生は1週間程度の間にできる限り、興味のある分野やしてみたい研究内容を指導してくれそうな教員の元を訪れ、直接面談しながら担当教員を選ぶ。面談の際、教員側も学生の志向する研究内容と自分の専門性とのマッチングや研究に対する意欲などを確認するが、私は一年間に及ぶ研究活動を行うことが相当量の時間と努力を必要とすることや研究内容が子どもに何をもちたのかという視点を抜きにして考えてもらっては困るということを充分説明し、納得の上で受講するよう話し合うようにしている。

その後の登録によって人数に偏りが出た場合には教員と学生との話し合いによる調整が必要になる場合もあるが、ほとんどそこまでで担当教員が決まり、抽選による振り分けなどは過去一度もなかった。

造形分野への希望者は毎年多く、教員一人当たりに対する平均学生数をいつもかなりオーバーする。2008年度も9名の学生をゼミ生として受け入れた。

その中の一人が今回取り上げる前川である。

前川は1回生時に「造形表現Ⅰ」「造形表現Ⅱ」、2回生時に「幼児美術」で私の授業を受講しており、物を作ったり、描いたりすることが好きなこともあって、迷うことなく私のゼミを登録したようである。

最終的に登録人数が9名であったため全員を受け入れることにして受講登録は完了した。

<研究活動への導入>

受講登録完了後、4月24日に第1回目の集まりを持ち、今後の予定等についてのガイダンスを行った。

この段階ではまだどのような研究をするのか、研究成果を論文にまとめるのか作品を制作するのかさえも決まっていない。最初からこれを作りたいというようなはっきりとした目標を持ってゼミに臨むことは極力避けるようにということを面談の際に伝えてあるので、当然の結果とも言える。学生達にとっては、自主的に研究活動に取り組むというような経験はほとんど初めてのことなので、この状態からのスタートはむしろ好都合と言える。

このゼミには造形や美術など作ったり描いたりすることを好む学生が集まっているので、ややもすると自分の作りたい作品を趣味的に作る事が研究活動であると勘違いされるおそれがある。それを避けるためガイダンスでは、作品は研究の結果であり、それが論文の形をとることもある、ということを指導するようにしている。そして、研究の中心にまず「子ども」を据えることを強調する。

2年間の本科での学びの中で、それぞれ学生は自分なりの教育観や保育観を形成してきているはずであるし、教育実習などを通じてある程度子どもの実態に触れる経験もしてきている。そしてこれからの1年間、専攻科(保育専攻)においてより深く勉強をし、将来質の高い優れた保育者を目指す学生にとって、このゼミでも一度自分の教育観・保育観を見つめ直し、深い子ども理解の上に立って自ら設定したテーマについて研究を進めることが、その目的を達成し、自己肯定感を獲得するための契機となると考えるからである。

<主な研究活動の内容>

ゼミ生には1年間の予定表を配付し、おおよその見通しを持って研究活動に入れるようにした。予定表は以下の通りである。

4月～5月

話し合い、調査、見学 etc. → テーマの設定

- 5月26日(月)～6月7日(土) [保育実習ⅠA]
 テーマの確認、新たな視点
- 6月 保育実習からの報告、話し合い → 研究内容を決定、研究計画を提出
- 7月 アイデアスケッチ、製図、材料の調達 etc. → 試作
- 8月 ボランティアなどで試作品の検証 → 改良 → 製作
- 9月8日(月)～9月20日(土) [保育実習ⅠB]
 可能であれば検証、新たな視点
- 9月 施設実習からの報告、話し合い
- 9月～10月
 製作 → 完成(仮) 論文の執筆を開始
- 10月20日(月)～11月1日(土) [保育実習ⅡまたはⅢ]
 検証
- 11月 保育実習からの報告、話し合い
- 11月～12月
 改良 → 完成 論文の執筆
- 1月 発表会 論文の仮提出
 作品の改良・修正 論文の添削・修正
- 1月30日(金)
 作品・論文の最終提出(17:00まで)
- 2月 学外での発表等
- 2月19日(木)
 「研究録」の原稿(A4見開き2ページ・Word文書データ)提出締切
- 3月19日(木)
 「研究録」の発行・配布

<テーマの設定>この予定表の通り進めることとし、前期はほぼ週1回の集まりを持つようにした。特に最初は全員での討論を心がけ、各自が持っている教育観・保育観や子ども観を検証し、お互いに補完し合いながらより確固としたものになるよう話し合った。また、子どもにまつわる最近の出来事や話題、気になる事柄などを話し合っ、自分が興味を持てるテーマを探らせるようにした。私は討論や話し合いが活発になるようコーディネートしたり、話題が停滞しがちになった時新たな方向性を示したり、学生の知識だけでは解決できないような状態に陥った時には可能な範囲でヒントや解決策を提供したり、といった役回りに徹し、できるだけ学生自らが自分の問題としてテーマを把握できるように努めた。

<調査・見学>ある程度自分のテーマが見えてきた頃に、それをより強固なものにするため、あるいは作品化する際にすでに似たようなものが存在しないか、またもっと優れたものがあるのではないかと、というようなことを検証するために調査・見学の機会を設けるようにしている。具体的には「有馬おもちゃ博物館」や「三鷹の森ジブリ美術館」などである。世界的に知られる優れた遊具・玩具などの展示は学生にとって刺激となり触発されて思わぬアイデアに結びつくこともある。

<保育実習>研究活動中3度ある保育実習(保育園や児童福祉施設で行う実習)を、研究内容と進捗のチェック期間として位置づけた。自ら設定したテーマや作品を実際に子どもの中に置いてみて、妥当性を検証し、テーマや研究内容についての新たな視点を獲得するチャンスと捉えるよう促した。また、3度の実習期間を節目と捉え、進捗をチェックするようにした。なかなか予定通りには進まない学生もいるが、遅れているなりに自分の遅れがどの程度のものであるかを知る目安になるので、以後のスケジュールを立てやすくなることが利点として挙げられる。

<学外発表>私の修了ゼミの場合、研究成果の発表を作品形式とする学生が多いが、できるだけ学外での発表を勧めるようにしている。

子どもを中心に据えた研究である以上、またそれが作品という形をとるのであればなおさらのこと、子どもへのフィードバックがなければ意味がないと考えるからである。いくら大人が善かれと思って作った遊具でも子どもが見向きもしなければ、机上の空論と同じことである。また、子どもは大人が考えもしなかったような遊び方をしたりもする。想定外の遊び方によって破損するようでは子どもの遊びを理解しているとは言えない。実習やボランティアなどの機会を利用して子どもの中で十分な検証を行った作品は、子どもの心を捉え、思いも寄らない遊び方にも耐えうるだけの安全性を備えたものとなる。

これまで具体的には2回生の「幼児美術」受講生による卒展に合同で出品・展示するという形をとっている。この卒展は主に遊具を中心とした展示で、会期中多くの子どもたちが遊びに来る。乗ったり触れたりして遊べる展覧会ということで、これまで32年の歴史があり、ある程度定着してきている。入場者数は毎年400～500人くらい、そのうち子どもの数は3分の1から半数程度とみられる。子どもたちの年齢構成は0歳か

ら小学校4年生くらいまでと幅広く、遊び方も千差万別である。5日間の会期中、子どもたちの激しい使用に耐えるためにはあらゆる遊び方を想定し、対策を講じなければならない。

ここでの発表・展示はテーマに沿って制作した作品が子どもの中で遊ばれ使用されることで、意図したものが達成できたかどうかの最終検証の意味合いと同時に、学生が自分の作ったものを媒体にして社会に繋がっているという社会参加意識を実感する機会でもある。

子どもとのコミュニケーションはもちろん、必ずといっていいほど保護者が、子どもを遊ばせてもらったお礼とともに作品に対する感想を言ってくれる。

「こんなに素晴らしい、子どものことをよく考えられた作品を作る学生さんだから、きっと素敵ないい先生になられるでしょうね。」という一言が学生に、達成感とともに、社会の一員として役に立てるという自信を与え、それが自己肯定感の獲得につながるであろうことは想像に難くない。

<受講生 前川の場合>

受講生 前川は「くまーなっつ」と題する4段重ねの巨大な布製クッションを制作し修了研究とした。

直径90cm×高さ30cmのドーナツ状のクッションが3段、それぞれ赤、白、青のキルティング生地を縫製したものにスポンジを細かくしたものを詰めて作られており、その上に同じく黄色のキルティング生地で作った熊の頭が乗っている。全部積み重ねると135cmと5歳児の身長より高くなり、1個あたりの重量もおおよそ3kgと子どもが持ち上げるにはギリギリの重さに設定している。一見ソフトで巨大なだるま落としのようだが、前川も最初は巨大なだるま落としをイメージしていたことに起因する。タイトルは「くま」と「ドーナツ」からなる前川の造語である。

前川がこの作品を作るに到ったテーマ設定の理由は以下の通りである。

「私がこのテーマを選んだ理由は、遊び方の枠のない、子ども達が自由な発想で遊びを作り出せるものを作りたいと思ったことがきっかけです。

保育実習など様々な場で子ども達とふれあい、私たちに考え付かない遊びを子ども達は次々に作り出していきます。落ちていく葉っぱや木、石や空き箱、私たちにその辺に転がっているものとか認識しない物でも剣になったり宝箱、宝石へと姿を変え子ども達

には全てが玩具になっているように思えます。

そこで私は子ども達が自由に遊びを考えることの出来るものを作ることにしました。」(『「修了研究及び論文」研究録 Vol.5』夙川学院短期大学児童教育学科・専攻科(保育専攻) 2009 P.51)

このようなテーマを設定するまでにほとんど前期すべてを費やした。後期になってからもこのテーマをどう具体化するかということがなかなか決まらず、何度も悩んだ末ようやく後期の保育実習の前後辺りにアイデアが固まったようである。

私の「修了ゼミ」では作品による発表の場合、制作に費やす時間以上に制作に到るまでの考察のプロセスを重視する。いかに優れて完成度の高い作品でも、このことが子どもに何をもたらすのか、子どもにとってどうなのかということがきちんと考えられていない作品は評価しない。というより、子どもの視点からの問いかけを何度も繰り返す中で、学生自らがそのような視点を形成して行けるように配慮している。

アイデアが決まってしまうと、後は安全性や丈夫さなどに気を配りながら、ひたすら制作に励む。時間的な余裕はないため大きな失敗は許されない。

前川は平面の布をはぎ合わせて立体を作る工程において、実物の5分の1程度の試作品を制作した。特に熊の頭の部分の型紙を取るのに苦労していたようだが、試作品を作っていたおかげで何度かの失敗を経たものの何とか完成に漕ぎつけた。

中に充填する材料は、価格や重量のことを考慮してスポンジを細断して使用することとした。

縫製はミシンを使用した。耳や鼻などは子どもの荒っぽい扱いにも耐えるよう念入りに手縫いを施している。また小さい子どもの興味を引けるように耳と鼻には押すと音が出るプラスチック製の笛を入れた。

さて、完成した「くまーなっつ」であるが、副論文とともに提出後、2月14日(土)～18日(水)に兵庫県民アートギャラリーにおいて開催された「第32回幼児美術卒展」に出品・展示した。またその後3月27日(金)～29日(日)に原田の森ギャラリーにおいて開催された「子どもアートフェスティバル ゆめのはこ2009」にも依頼を受けて出品・展示することとなった。

子どもの中に置かれた「くまーなっつ」は他のどの遊具よりもよく子どもが遊んだ。遊び方は全く自由で、積み重ねる、上に乗る、転がす、中に入る、体当たりするなどあらゆる遊びが考えられるが、あくまでも子どもの発想に委ねることを旨としているのは前川のテ

一マ設定の理由にある通りである。実際子どもが遊ぶ様子を見ていると、上記のようなあらゆる遊びが観察できた。

また「重さがあるので転がしたり動かしたりするのは子どもにとっては簡単に出来ることではありませんが、子どもたちにとって簡単には動かせない重さの物を一生懸命動かすことに楽しみを感じ、動かせたときの達成感は大いなものではないかと考えました。」

(『「修了研究及び論文」研究録 Vol.5』夙川学院短期大学児童教育学科・専攻科(保育専攻) 2009 P.51) というように、4歳児が何度も崩しては積み直すという行為を繰り返す姿も観察された。4段目を首尾よく積んだ子どもの誇らしげな様子が印象的である。

「そして、子ども一人では持ち上げることは出来るがかなり大変だと思います。数人の子ども達で持ち上げるのを協力したりすることで一緒に遊ぶきっかけを与えたり、直径90cmと子ども2人ぐらいで乗り遊ぶことも出来ます。」(『「修了研究及び論文」研究録 Vol.5』夙川学院短期大学児童教育学科・専攻科(保育専攻) 2009 P.51) というように、複数の子どもが協力し合って積み上げる姿も何度も観察された。

中でも最もよく遊ばれたのが積み上げたドーナツ状の穴の中に入るといふものである。これについても「だるまのように積み重ねることもでき、中に入って遊べるようにしました。」

きっかけは、実習中に感じたのですが穴や隠れることの出来る場所などに入ることを好んでいるように思います。

1m35cmと小学生ぐらいの子どもが隠れることの出来る高さなので隠れて遊ぶことも出来ます。」(『「修了研究及び論文」研究録 Vol.5』夙川学院短期大学児童教育学科・専攻科(保育専攻) 2009 P.51) と、書いている通り、前川の設定したテーマは「くまーなっつ」という作品において完全に実現できたといえる。

そしてそれは、決して机の上のアイデアだけで成し得たものではなく、実習やボランティアを通して見てきた生の子どもの姿があったからこそ実現できたものである。深い子ども理解に裏打ちされた作品が持つ魅力は子どもが一番よくそれを知っている。

「卒展」および「ゆめのはこ 2009」の会期中、子どもたちが「くまーなっつ」で遊ぶ様子を約80枚の写真に記録しているが、ここでは紙幅の関係でその中の一部12枚の写真を掲載することとする。





＜修了ゼミを通してのまとめ＞

今回「修了ゼミ」の中でも比較的好結果を得られた例として受講生前川の研究成果を取り上げたが、他にもこれに勝るとも劣らない研究成果を挙げた例がない訳ではない。ただ、今回取り上げた「くまーなっつ」は学外発表の機会の中で、子どもの遊ぶ頻度、遊びの多様性、遊びの質などにおいて他を圧倒していた。

作品とともに提出された副論文に書かれていたことと現実との一致ということもこの作品を取り上げた理由の一つである。すなわち前川の設定したテーマが意図通りに実現したということである。

子どもを研究の中心に据え、子どもからの発想を大切にするという本ゼミの意図をよく理解し、十分な検証と考察を繰り返しながら進めた前川の本研究が、その中心である子どもへのフィードバックにおいて意図通りの成果が見られたことは、本ゼミの取り組みがなかなか間違っていないことの証でもあると安堵している。

この研究を今後本ゼミを進めて行く上において、自分の中での一つの試金石として捉えたい。

4. 文献

『「修了研究及び論文」研究録 Vol.5』 夙川学院短期大学児童教育学科・専攻科（保育専攻）2009

ピアスーパーバイザーからのコメント

本研究は、専攻科（保育専攻）における修了研究（修了ゼミ）の一例を取り上げて、それがいかに成功に至ったかを、指導教員の立場から報告したものである。まず、執筆者が行ってきた修了ゼミの進め方、指導の仕方、考え方を概説し、次は取り上げられた成功例について具体的な経過を述べている。その論述は適切であり、ゼミの成果である作品の製作過程と完成後の特色が手に取るようによくわかる。

（担当：中広全延）